

# 松江いなさ



題字揮毫 千家達彦 (元いなさ会会長)

写真提供 板垣 宏 (写真家・高校7期) 表紙写真: 昭和50年代後半の大鳥居

## 第37号

### 宇迦橋から神門通りへ 変わらぬ原風景を想う

会長 江口博晴 (高校十期)



宇迦橋は、出雲大社の神域へ入る第一の関門と言われている。その宇迦橋が、昨年十二月に新装架け替え工事を終え、竣工・開通した。併せて正面の大鳥居も修復され、見違えるように美しくなった。

先般、宇迦橋南詰の第一関門に立ち、そこから勢溜へと直線に伸びる「神門通り」を改めて確かめたいとの思いにかられ、出雲大社参拝に出かけた。久しぶりに宇迦橋の袂に立つと、ここが私たちの故郷であることをあらためて実感する。大社高校で学び、それぞれの道へ進んだ私たちにとって、この街の景色は、いつまでも心の中であり続けるものだ。どこか新しい街を訪れたかのような感覚を覚えながらも、変わりゆく街並みの中に、変わらぬ故郷の風が静かに吹いているように思えた。

このたびの同窓会誌の表紙には、昭和五十年代後半の「神門通りの大鳥居」の写真が掲載されることになった。当時の写真を眺めていると、懐かしさとともに、どこか誇らしい気持ちが入り込んできている。懐かしさとともに、どこか誇らしい気持ちが入り込んできている。

街並みの姿は変化しても、出雲大社へと続く道の空気、人々の心のよりどころとしての景色は、今も変わらずそこに息づいているように感じる。勢溜の第二の鳥居まで進み、振り返ると、はるか彼方に真っ白な大鳥居が松並木の上にひととき高くそびえ立っている。まさに、これこそが原風景である。

一畑電鉄の駅から勢溜へと、多くの参拝客や観光客が土産物店などに立ち寄りながら行き交う姿を見るにつけ、かつての閑散としていた「神門通り」を思い浮かべ、大きな変貌に驚きを禁じ得ない。ここに至るまでの行政や民間をはじめ、関係者の皆さんの多大なご尽力に敬意を表するとともに、古代から積み重ねられてきた町の歴史、そして出雲大社の持つ大きな力を、あらためて心の底から感じている。

激しく、急速に揺れ動く現代社会の中で、人の心にも大きな変化が生じ、SNSなどを通じて人と人とのつながりが希薄になりつつあるのではないかと不安も覚える。だからこそ、変わらぬ原風景の存在が、私たちの心を静かに支えてくれるのかもしれない。今後の大社の町のさらなる発展と、そこに暮らす人々の安寧を、心から祈りたい。

重要文化財「旧大社駅本屋」  
保存修理事業  
次の百年に向けて

出雲市文化財課 係長

吾郷 誠氏（高校四十一期）

明治以降の地域社会に、近代の到来を強く印象付けた事業が鉄道敷設でした。山陰地方では明治三五（一九〇二）年に境・米子・御来屋間の官営鉄道が開通し、明治四三（一九一〇）年には出雲今市駅（現・出雲市駅）まで延伸し、明治四五（一九一二年）には京都駅から出雲今市駅までが鉄路で結ばれました。出雲今市・大社間の約七、五kmの支線（大社線）の敷設も進み、明治四五（一九一二年）六月一日、大社駅は京都駅を起点とする山陰線の実質的な終端駅として開業しました。

大社線の敷設は、鉄道院（当時、鉄道を管轄した国の機関）の主導で進められました。問題は駅をどこに設置するかでした。駅ができる以前、出雲大社への参詣者は、出雲大社正面の勢溜を挟んで、西側の市場地区、東側の馬場地区の参詣道を通っていました。両地区の誘致合戦の結果、鉄道院が折衷案として荒木地区を提案。最終的には鉄道院の案が採択されました。従来の参詣道から離れた位置に大社駅が設置されたことが、後の「神門通

り」の整備につながります。現在、出雲大社へ向かう主な参詣道は、「神門通り」と呼ばれる通りです。この通りは、最も新しい参詣道で、大社線開通後に設けられました。開業初年度の大社駅の乗降客は一四万人でしたが、翌年度には三三万九千人と急増し、参詣客が押し寄せるようになりました。新たな課題は駅から出雲大社へ向かう参詣道の整備でした。



初代大社駅の開業 明治45(1912)年

この事業に着手した人物が、当時の鳥根県知事・高岡直吉でした。六間（約一一m）幅もの直線道路案が示され、県議会では反対論もありました。しかし、知事は「大社は鳥根県の大社でなくして天下の大社である」と主

張。最終的には、当時としては異例の規模の直線道路が大正三（一九一四）年に開通し、当時の出雲大社宮司、千家尊福により「神門通り」と命名されました。

大正期に入ると、山陰本線のさらなる延伸や山陽と山陰を結ぶ山口線との接続等により、大社駅の乗降客が大幅に増加しました。このため、駅施設の増改築が計画され、二代目の駅舎として新たに建設されたのが、現在の重要文化財「旧大社駅本屋」の建物です。大正一二（一九二三）年九月に起工し、翌大正一三（一九二四）年二月に竣工しました。工事は当時の鉄道省神戸鉄道局米子保線事務所によって行われ、本屋設計は同局の丹羽三雄が担当しました。

二代目駅舎は、木造、平屋建て、棧瓦葺き、建築面積約四四一㎡で、西側を正面にして建てています。屋根は、中央部を切妻屋根として一段高く配し、両翼部は端部を正面側に突出させた入母屋屋根となっています。内外の壁は漆喰で仕上げられ、屋根には千鳥破風や葺股、鴟尾などを配し和風を印象付けるデザインが採用されています。

平面で見ると、正面中央の車寄を突出させた中央部を中心に、両翼を延ばした南北に長い左右対称の形をしています。中央部は大空間の三等待合室があり、その東面には中央に出札室、その両側に改札口を設けています。南翼には正面側に一・二等待合室、ホーム側には手小荷物扱室と保管室、北翼には貴賓室（応接室）と事務室が配置されています。駅

舎の天井は、三等待合室中央部を折上格天井おきあげこうてんじょうとし、貴賓室（応接室）及び一・二等待合室、三等待合室両端部は格天井となつています。随所に和風の意匠を凝らしつつも、小屋組みは、明治以降に西洋から我が国にもたらされた技術を採用した近代和風建築です。



二代目大社駅の建設 大正13(1924)年

大社線は、出雲大社参詣の玄関口として、山陰本線・支線のなかでも有数の乗降客数を誇っていました。戦後、全国的に旅行者が増加する中、大社駅の乗降客数が昭和四〇（一九六五）年度に一三三万人に達するなど、右肩上がりで推移しました。ところが、自動車

の普及が進み昭和四一（一九六六）年度以降は参詣者の動きも鉄道から自動車へと変化してきます。昭和四三（一九六八）年九月には、国有鉄道株式会社（国鉄）が財政再建のため、大社線を含む八三線区を廃止または自動車輸送に転換する、という方針を示しました。そして、昭和六二（一九八七）年の国鉄分割民営化を経て、平成二（一九九〇）年三月をもって大社線は廃止され、七八年の歴史に幕を閉じました。これにより、二代目大社駅も駅舎としての使命を終えました。

大社線の廃止後は、駅舎を含めた駅跡地は平成七（一九九五）年に大社町（現・出雲市）が取得し、平成九（一九九七）年には、駅跡地全域が島根県指定文化財となりました。また、廃線後も旧地にほぼ建築当初の姿のまま良好に保存され、かつ鉄道興隆期の地方駅舎の姿をよく留めている数少ない建物であるとして、平成一六（二〇〇四）年七月に「旧大社駅本屋」として重要文化財に指定されました。現在、重要文化財の指定を受けた駅舎は、旧大社駅本屋、東京駅丸の内本屋（一九一四年、東京都）、門司港駅（旧門司駅）本屋（一九一四年、福岡県）の三棟のみです。

一方で、永年の風雪に耐えた木造建築は、雨漏りなどの老朽化が進むとともに、耐震対策の必要性が確認されたため、令和二（二〇二〇）年度～令和七（二〇二五）年度にかけて保存修理事業を立ち上げ、五年の歳月をかけて大規模な修理工事を進めてきました。また、令和六年度（二〇二四）からは、防災施

設整備事業と高付加価値化改修事業もスタートさせ、公開活用に向けた改修も行いました。



工事が完了した旧大社駅 令和8(2026)年

平成二年（一九九〇）の廃線まで、多くの人を迎え、見送った大社駅。進学や就職、初詣、修学旅行や新婚旅行、戦時中の出征など、人生のそれぞれの場面で、人々が大社駅を通過していききました。大社駅は、一人ひとりの大切な思い出とともにある建物であると言えます。本事業を契機に、未来へ向かって新たに出發した重要文化財「旧大社駅本屋」が、皆様に愛され、百年後、二百年後に受け継ぐことができるよう、本市としては、維持管理に努め、保存修理を重ねながら、その魅力を発信する取り組みを続けてまいります。

## 「健康あれこれ」



元・島根県立中央病院泌尿器科部長  
川上 一雄 氏  
かわかみ かずお  
(高校二十三期)

♪宇迦の遠山 雲低く

くれなる 匂ふ 空の色

松のみどりも神さびて

杵築の宮を仰ぎみる

学びの舎の尊さよ

高き正義と真実の

光り照らせりこの舎に

大社高等学校校歌

竹友藻風 作詞 下總皖一 作曲

それにしてもこれほど嬉しそうに大社高校の校歌を高らかに歌った講師さんは無かったように思います。第二十三期卒業の川上一雄先生は講演の前から校歌をレジュメの最後に付けたことをスタッフに伝えて講演を始められました。それと川上先生のお住まいは大社の「駅通り一区」で土産物店だった由。廃業してから建て替えて今も住んでおられ、保存工事中の旧大社駅の写真も見せて、地元の利用で見せてもらえると嬉しそうに話されま

した。

テーマは「健康あれこれ」というタイトルからあれこれと想像しながらお話を聞けば、最初から最後まで泌尿器疾患のお話でした。

ちなみに川上先生の医師としての経歴は次の通りです。

昭和五十四年四月から

島根医科大学泌尿器科教室文部教官助手

昭和五十九年四月から

国立大田病院皮膚泌尿器科医長

平成十一年一月から

県立中央病院泌尿器科医長のち部長

気になるおしっこに関わるお話から膀胱炎、腎臓や尿管結石、泌尿器がんの話は、まさに先生の四十五年間の医師人生の集大成を学ばさせていただく時間となりました。

ご講演の中で何度も出てきた言葉は「医学の進歩」という言葉でした。島根医科大学附属病院での新米医師時代は上級医師の内視鏡手術の模様を学ぶにも大変だったようですが、今ではモニター画面で共有でき、録画もできるので両者とも楽になったそうです。

前立腺癌の診断も直腸からの触診による診察だったものが、腫瘍マーカー（P

SA）の開発やCT、MRI、PETなど一度は聞いたことのある画像検査の導入・進歩で診断精度が高まり早期発見が可能となったため、手術症例が増えているとのこと。しかも腹腔鏡・ロボット支援手術など患者の負担を軽くする手術方法に変換されてきており、それは以前では考えられないほどの進展のようです。

今回のご講演の中で川上先生が一番訴えたかったことは、「インフォームド・コンセント（説明と同意）」という事だったと思います。

つまり患者が病気や治療法について十分な説明を受け、理解した上で自らの意思で治療を受けるか否かを選択する（同意する）という意味。昔の医療では、医師が患者に治療法を選択してもらってから治療することは少なかつたと思います。患者側も「先生にお任せします」と言った風潮であったと思いますが、今は全く違います。今回の限られた時間での講演では詳細までは語り切れなかつたのではないかと思います。しかし今回のように先生の長い医師経験に基づく説明と、最近の医学の進歩の話聞いた患者はみな納得して受けたい治療法を選択するはずだと思います。

川上先生、いい先生です。

（文責・今岡克己）

松江で活躍する

## 大社高校OB訪問記

島根県立松江農林高等学校 校長

板垣<sup>いたがき</sup>悟史<sup>さとし</sup>氏（高校三十八期）

松江市内で活躍する大社高校卒業生を訪ねる本企画。今回は、昨年夏の全国高等学校野球選手権大会期間中に「育成功労賞（※）」を受賞された、松江農林高等学校校長の板垣悟史さんを訪ねました。校長室には座右の銘とされる「陰徳を積む」という書が掲げられています。

板垣さんは、大社高校野球部で今も語り継がれるスラッガーです。一九八五（昭和六十）年、三年生の夏に主将としてチームをまとめ、第六十七回全国高等学校野球選手権大会、いわゆる夏の甲子園大会に、二十二年ぶりとなる出場を果たしました。開会式直後の第一試合で北海道代表の旭川龍谷高校に延長戦の末に二対三で惜敗しましたが、「後輩たちにも、ぜひこの舞台を経験させたい」という思いが、のちに指導者の道を志す原点となったそうです。慶應義塾大学に進学され、東京六大学野球でも活躍されました。なお、お父様は松江いなさ会報誌の表紙写真を長年提供されている

写真家、板垣宏氏（高校七期）です。

今春からは校長二年目を迎えられるすが、「どうしてもやり遂げたいことがある」と語られたその言葉が強く印象に残りました。高校野球指導に情熱を注いできた教員生活が大きく変わったのは、校長就任後だと言います。令和七年度は、全国校長会や日本学校農業クラブ全国大会など、前後一週間に及ぶ長期出張を重ね、これからの学校教育に必要な視点を貪欲に吸収された一年だったとのことでした。

少子化の進行、高校授業料無償化の影響で高校はどうなるのか、生徒たちがふるさと島根に希望を持つにはどうしたらいいのか・と、話題は尽きません。生徒たちにも熱く問いかけます。「人口減少というが、島根の人口密度は、世界の主要都市の人口密度よりも大きいことを知るのも大切だ！」その言葉にはかつて野球部を率いていた頃以上の熱量が感じられました。

近い将来、可能であればふるさと大社高校で最後の教鞭を執りたいとも話されます。ただし、野球部顧問ではありません。板垣さんがやり遂げたいこと、それは中高一貫教育の実現です。体育科を持つ進学校だからこそ可能な附属中学校の開設。公立中高一貫教育を導入していないのは、全国で島根を含むわずか五県だけだそうです。実際には様々な苦勞が伴うだろうと思いま

すが、これまでの野球人生の中で培われた精神で私たちの母校に新たな風を吹き込んでいただくことを期待したいと思います。

取材を終えて、昨年八月の甲子園直後に伺わなくて本当に良かったと感じました。あの時期であれば、「過去の栄光」をなぞる原稿になっていたかもしれません。板垣さんの「これから」を見据えた、実り多いOB訪問となりました。

（文責・今岡克己）



※育成功労賞 二十年以上にわたって高校野球の育成と発展に貢献した指導者に対して、日本高等学校野球連盟と朝日新聞社から送られる賞。受賞者のうち、八人は、毎年、阪神甲子園球場で行われる全国高等学校野球選手権大会期間中の八月十五日第二試合開始前に授賞式がある。

# 母校だより

## サッカー部 全国大会出場

サッカー部は、第104回全国高等学校サッカー選手権大会に、島根県代表として、4年ぶり十二回目の出場を果たしました。

県大会では、対戦相手に一点も与えることなく5試合全試合を無失点に抑え、堅い守備を強みに勝ち上がることができました。

全国大会1回戦では、新潟県代表の帝京長岡高校と対戦しました。相手の高い個人技を生かした攻撃に苦しみながらも、粘り強い守備で得点のチャンスがいましたが、前半終了間際に失点。後半は相手の勢いある攻撃に対応しきれず、0対5で敗戦となりました。

結果は悔しいものとなりましたが、全国の舞台で思い切ったプレーができたことは、選手たちにとって貴重な経験となりました。この経験を糧に、これからもさらに高いレベルを目指して、日々の練習に励んでいきます。

全国大会では、多くの皆さまに会場へ足を運んでいただき温かいご声援をいただきました。本当に大きな力となりました。有難うございました。引き続きご声援のほどよろしくお願いたします。部員一同、「全国大会優勝」という形で恩返しできるよう、精一杯努力を続けていきたいと思います。



### 1. 進学状況 (合格延べ数・過年度卒業生を含む)

		令和5年度	6年度	7年度
大	国公立	71	72	92
	私立	200	271	214
短	公立	6	14	14
	私立	10	9	4
高専		18	13	20
合計		305	379	344

### 2. 就職状況

		令和5年度	6年度	7年度
公務員		5	5	4
民間事業所		3	4	2
合計		8	9	6

### 表紙に寄せて

板垣 宏 (高校七期)

写真は昭和五十年代後半の初夏のものである。令和七年には白いコンクリート作りの大鳥居も宇迦橋の改修工事も完了し、最近はこの鳥居を第一の鳥居として、ここから参拝する観光客も多くなっている。しかしドローンなどない時代、この写真を撮影したときにお借りした高い建物はどこだったのだろうか？

# 会務報告

事務局長 糸賀耕一（高校十九期）

会員の皆様のおかげで諸事業を行えたことを感謝します。今年の会報では四年ぶりに全国大会出場のサッカー部を取り上げました。今後とも松江いなさ会の輪を大きくしていきたいものです。どうか末長いお付き合いを宜しくお願い致します。

## 令和七年度の事業

- ▼令和七年四月二十六日 会計監査
- ▼令和七年四月二十六日 第一回役員会  
前年度の事業報告・決算報告。
- ▼令和七年四月二十八日  
本年度の事業計画・予算案承認。
- ▼令和七年六月二十一日 第三十六回総会  
総会案内のお知らせ、会費納入お願い、会報第三十六号を発送。
- ▼令和七年六月二十一日 第三十六回総会  
於 サンラポーむらくも  
参加者 二十六名（来賓四、会員二十二名）
- ▼令和七年十二月六日 第二回役員会  
本年度会計中間報告・本年度事業中間報告。
- ▼令和八年三月七日 第三回役員会  
本年度第三十六回総会の反省。  
来年度第三十七回総会・懇親会について協議。  
同日 会報第三十七号編集委員会  
会計中間報告。
- 令和八年三月七日 第三回役員会  
令和八年第三十七回総会について。  
来年度の事業計画・予算案 承認。  
役員改選について。
- 同日 会報第三十七号編集委員会

## 令和7年度松江いなさ会決算書

収入総額	464,720 円
支出総額	284,866 円
差引金額	179,854 円

### 1. 収入の部

単位：円

項目	本年度予算額	本年度決算額	増減	摘要
会費	200,000	200,000	0	@2,000×100名
寄付金	55,000	57,000	2,000	いなさ会、 県庁いなさ会等
雑収入	68	188	120	普通預金利息
繰越金	207,532	207,532	0	
合計	462,600	464,720	2,120	

### 2. 支出の部

単位：円

項目	本年度予算額	本年度決算額	増減	摘要
会議費	20,000	14,494	▲5,506	役員会、役員会会場費等
事務費	50,000	45,409	▲4,591	総会出欠葉書代513枚等
事業費	350,000	210,712	▲139,288	総会、会報発行、 案内状発送郵券等
慶弔費	10,000	0	▲10,000	
雑費	20,000	14,251	▲5,749	振込手数料等
予備費	12,600	0	▲12,600	
合計	462,600	284,866	▲177,734	

基金積立金現在額 200,000円

## 令和8年度松江いなさ会予算(案)

### 1. 収入の部

単位：円

項目	前年度予算額	本年度予算額	増減	摘要
会費	200,000	200,000	0	@2,000×100名
寄付金	55,000	55,000	0	
雑収入	68	146	78	預金利息等
繰越金	207,532	179,854	▲27,678	
基金より	0	200,000	200,000	基金取り崩し
合計	462,600	635,000	172,400	

### 2. 支出の部

単位：円

項目	前年度予算額	本年度予算額	増減	摘要
会議費	20,000	15,000	▲5,000	幹事会、役員会、 事務局費等
事務費	50,000	50,000	0	総会出欠はがき代等
事業費	350,000	330,000	▲20,000	総会、会報発行、 案内状発送郵券等
慶弔費	10,000	10,000	0	
雑費	20,000	20,000	0	振込手数料等
予備費	12,600	210,000	197,400	
合計	462,600	635,000	172,400	

# 今年度の総会 御案内

日時 六月二十一日(日)

総会 午後一時から

記念講演 午後二時から

懇親会 午後三時から

懇親会会費 六千円

会場 サンラボーむらくも(松江市殿町)

記念講演 講師と演題

島根大学法文学部 准教授

宮澤 文雄氏

「大社のラフカディオ・ハーン」

## 講師紹介

専門はアメリカ文学。

島根大学着任後、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)の研究を始める。近年では、東日本大震災をはじめとする災禍の文脈から『怪談』に代表されるハーンの霊性の文学の再評価に取り組む。

また、住民有志とともにハーンの親友・西田千太郎の旧居の修繕保存活動及び史料の調査研究にも従事する。

八雲会会員。

山陰日本アイルランド協会副会長。

一般社団法人まちなかプラン理事。

## 講師からの挨拶

生まれは鹿兒島、育ちは埼玉県秩父市です。

高校卒業後、山形県尾花沢市の母方の親戚宅で農家の見習いを経験したのち、宮城県仙台市の大学、大学院に通いました。

様々な土地をめぐったという意味では、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)と似ているかも知れません。しかし、ハーンは南方志向、わたしは北方志向ですから、足取りは似ていても足先の方角がことなります。そんな私も縁あって十一年前に島根大学に赴任しました。その時はまだ自分がハーン研究に取り組むなどと思いませんでした。

今ではハーン研究に加えて、貴会の今岡克己さんと一緒にハーンの研究だった西田千太郎の旧居の修繕保存活動に取り組んでいます。今後も様々なイベントや活動を展開していきますので、お気軽にご参加ください。

このたびの講演では、大社とハーンの間わりについてお話しいたします。記録に残っているだけでも、ハーンは出雲大社を三度訪れており、その体験を紀行文として発表しています。これらの記録を手がかりに、ハーンにとって大社とはいかなる土地であったのかを、あらためて考えてみたいと思います。

## 皆様へお願い

松江いなさ会は、皆様からお納めいただく会費で運営しており、御協力いただいておりますことに、厚く御礼申し上げます。

年会費は二〇〇〇円、納入期限は、十二月

末日でございます。昨今、諸経費の高騰もあり、会計事情は極めて厳しくなっています。何卒、会費納入を宜しくお願い致します。

## 編集後記

地元銀行が試算した朝ドラ「ばけばけ」の経済波及効果は年間で80億円だそうです。小泉八雲も憧れた杵築の大社を私たちの故郷と誇れるのは、我々同窓生の特権ですね。ドラマの人気にあやかっ、会員数と会費納入拡大も期待したいと思います。

今岡克己(高校二十四期)

